

女款討松田系呂

月

津田文庫

文庫 1

1640

10

15

20

25

30

女説討松田系圖

巻之二

於道、自害口事

下女おろこの供を討事

松の殿も幼少の時と信ははるはる一物姫と
河の流る流將生苑のこころし生と必成
の母の男のけしき定は浅る方なりやけし
成道はさらば親重の供とせし後か事



010190601060

多摩 秋邊過し 以女道親と伝安草子
國々 妻皆成康 けつおよき事は何れ
相心ひつ 水嶋の津敷に首の無けはるのよ
江花流の雪の影を折花のよ 東國走とる
お下のお力乞へ 女ある 海浜の村へ入る
父の行し 子供ひ が是て 天孫との事
あふ 移せん 身を切か 年と魂と 清く
海へ 志し 心も 入 唐中とのよ 志し

新し 物と咽との境と 思ひ 不々 怪来ある
そよ 女とえ 夢と じつ 夢と 道と 刀を 授けて
うら 依て 傳とて 息 流し 夢と 何と されぬ
し 心 色 夢と 花 花 散り 夢と 向は せ 風
ち 心 夢と 身 の 交 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
是 非 と あり 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
この こと 別は 信や 武 拾を 威の 夢と 月 の見 夢と
月と 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と

心より氣死しりし愛れとの世の女情はぬ人こそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
はあつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ

世に女ありては日比名所つわとてはつらに類なり
胸隆きし泣く海甲花化しとては一寸七先(中)
以(中)とては是は女もよこふは有るしはは
それをもては(中)は是は女もよこふは有るしはは
指より吃交り付かぬちを明しはは中指の
あつらひをねねおくりし女も阿の斯侍事のをるるこそ
夜の心は舞のこしとてははははははははははははは
かたははははははははははははははははははははははははは

歩むらひ口細く心もはげしくなりぬるに
とや有る人ぞもよもやも類はらひぬれ
所金乞方行進しそふたの世路ををそ
あはれなきとまじれ進んてまじくも
や引返しそをゆるるるはよ入局をせしむる
隣部やのり舟乗とそ女物言ひて飛りし
花の思をそとて海をのりやあし
まのれは海人のたのしみありぬる

帰りにしとちよはたかき道が遠く入るる金
しぬれぬるをいりて客のこころを
はげしき思をそとて海をのりやあし
押して見て河の満ちたを
引ぬけて金持を木一面よりけの血
了花の色を替りて果て息絶し
見るとは肝を痛く涙は海と
積の柏先地と押しそを

河津 せりやん根りも是なる事なるれ丸あ
海軍のころややえんくし根片迄の袖の圓
絞りの抱けをを絞りにかやしくと絞を
こけて絞るに却てはるは成すといふも
止め是中おろしに糸の或士のころ成すを
根の古紙をを絞るに絞るに絞るに絞る
あはれにやれ進も揮ふもやれ成すの
娘の人の絞を絞るに絞るに絞るに絞る

やんがせりやん根りも是なる事なるれ丸あ
海軍のころややえんくし根片迄の袖の圓
絞りの抱けをを絞るに絞るに絞るに絞る
あはれにやれ進も揮ふもやれ成すの
娘の人の絞を絞るに絞るに絞るに絞る

糸とくよ女と紙をきくま出れは糸の乃の
かすいとくよ史八定らお席の積下しおるま
しやうとくよとくよとくよとくよとくよ
けしとくよとくよとくよとくよとくよ
糸の乃の海女とくよとくよとくよとくよ
襖押紙とくよとくよとくよとくよとくよ
たきとくよとくよとくよとくよとくよ
肩の乃のけしとくよとくよとくよとくよ

たきとくよとくよとくよとくよとくよ
糸の乃の海女とくよとくよとくよとくよ
襖押紙とくよとくよとくよとくよとくよ
たきとくよとくよとくよとくよとくよ
肩の乃のけしとくよとくよとくよとくよ
たきとくよとくよとくよとくよとくよ
糸の乃の海女とくよとくよとくよとくよ
襖押紙とくよとくよとくよとくよとくよ
たきとくよとくよとくよとくよとくよ
肩の乃のけしとくよとくよとくよとくよ

よをりしとてしりしはれり女中などい誰か
近付しとてしりしをたて候飛鳥とてしりし
白鳥を結ぬ時しりし道月を後遊を
歌民のをはりしりしは切すしりし
念成まじりしりしりしりし死損しりし
きしりし簡魔りしりしりしを教しりし
科を切しりしりしりしりしりしりし
味もよとてしりしりしりしりし

於道十女を成り来りし事

附 ち道洋をせりし事

そを今を推しりしりしりしりし事し
やりしりしりしりしりしりしりし
りしりしりしりしりしりしりし
自害成りしりしりしりしりし
りしりしりしりしりしりしりし
りしりしりしりしりしりしりし
りしりしりしりしりしりしりし

夏せん長きりふまのあやをいふよふ雨の葉
あまの道がり女のさくらこりさつたの女は句
好より入の道しゆ所よりさしと離れられしを
以してあまの道と云ふはさしと入の道と云ふは
後自善の史記女あまの史の仇いふとてさし
控ま新くいふ句を女所いふよりさしと云ふは
和ら山根成中いふは平刻く中をさしと云ふ
久遠の事おれはさしと云ふの故の史記を女か

いふはさしと云ふの故の史記を女か
今はいさしく情をいふと云ふはさしと云ふは
是をさしと云ふ人の仇をいふは神と云ふは
亦いふはさしと云ふの故の史記を女か
皆いふはさしと云ふの故の史記を女か
興府大目付是を法をいふはさしと云ふは
皆いふはさしと云ふの故の史記を女か
是をいふはさしと云ふの故の史記を女か

一、其母の物語の終りて、
孫の好む自害被りて見し事
歎かば、
神意の品に、
自害被りて、
事、
作、

か、
事、
作、

澤井美 泣く月おとせ此翁をよきまを次のつら
振る名木の徒合をよき世にありて後をわづらふ
ふりし由中けり後之兩人の道しけるま
かたる中けり後人よきを改められたるま
替りた事しありて道に死骸を見ても一首に
糸の糸を救を熱くしよと泣き居る翁の翁のあり
抱えぬと祐天和尚の老翁を熱く抱えぬと君
香を焚きまかたしよと泣き居る翁の花を

通一經冊よ一首の翁を酒にて香煙の端まを
通一經冊よ

翁の花をわづらふと熱く抱えぬと君
ちるまにりよまの翁の翁のあり

卯月 是本女女道

生歳下一歳

をく如く澤よ元より子泣の翁の翁のありて
れ見ぬと何しと老翁の翁のありて

七代くねし... 静海をりけ静世
因防の友奥方道が秋見の兄人として書
至人の花... 以て紙冊成ハ世奥方より洋紙
也一紙くそしこよけいして例を離さる可
張りのおのて成しかむとより誰をうおひよ
あつたての外情の終りとしる理をえす
まゆる刻らそ終りせを法をり付親のえく
送りの文箱並に文庫を仔人交合て一夜あせ

刻を切字す見れハ文箱六冊のえくま一封印り
叔文庫の中よあしを入並りるもあし
一 地巻善之儀の物 一 油
一 懐中鏡 一 西
一 紙 一 包
一 鼻鏡袋 一 巾
一 香合 一 巾
一 信 一 枚

於道中絶く事

所^り西人死骸引渡の事

律^にカ^ハ渡^し事

鳥の将は死んじしむる時を律に渡り人乃
將は死んじしむる時を律に渡り人乃
中三人を以て味を以て替りてあり
又船の舟のえ一送り舟一通船を以て味
と事とれ三人を以て味を切指し見よと文の旨

山崎若水のいふに、
くどいといふ事、
一分難事、
中々いふ事、
物に中々いふ事、
細くいふ事、
事ある事、
いふ事

史よりお逃がり女とつゝ親の毛利甲斐守とある
少人地政を希なり松田物乞とす志し木物乞を
子あけれいひ事やふりていふそぬ西光と
ふりまのこし件の娘子を産くやうて件を
けし天も比るの物らの娘の事のみ成は
るやんといふもふもふもあふをうり
所没入ま合海軍を吏戸海に若れまふる人
お逃事一局は野いしとて要らさし事

強きよ好自害成せし事一は建之殘
理を好る所をよかあや殺善よ及い
主人の殺化けれぬ女のみと神降ぬと
其所又とてしとて及をもお和の次野た
面よりとてとて殺害成り及る物とて
欲討給あるに流石の流技之津儀お伊の
以備(今も川光)を向は野親れ
た虎と對し自今い好意成り方安に

分り付は沈之丸を宵は後文に引下り
後文に引下りて後文に引下りて後文に引下り
唯を周の書に引下りて後文に引下り
守りて後文に引下りて後文に引下り
けと後文に引下りて後文に引下り
後文に引下りて後文に引下り
かしの内侍に引下りて後文に引下り

の電に引下りて後文に引下り
後文に引下りて後文に引下り
後文に引下りて後文に引下り

是は後文に引下りて後文に引下り
後文に引下りて後文に引下り

が親助の思ひ乃や河の思ひ
天系報の思ひ乃や河の思ひ
が親助の思ひ乃や河の思ひ

洞子やしのおき事一而に成世公海くか道順の心
親拓は路々の後おされんれに云やし出知くよ
し新長表のまより美蓮の業のせ早本依
な高着衣の紐けて朱 一冊八分女房業の
母や立高の肝を満 一かや心主人様の親代
た女様のみおちりしおまのこを伝うけ出
中も心なうか 一と此路の先へ入地 一か
やもまのまの洞のじせの所へ是をけりて

親古礼受正安年成実見長の年くもと
入地 一とちりし 一と法しと 一と見つ 一と孫白群
やと 一と是道心舞のり 一と可が女様 一とおのり
まけの 一と依を 一と調したる 一と舞孫は世に
の 一と花に 一とちりし 一とちりし 一とちりし 一とちりし
けと 一と色に 一とちりし 一とちりし 一とちりし 一とちりし
迄志らみ前後不悟の見地 一とちりし 一とちりし
何と 一とちりし 一とちりし 一とちりし 一とちりし

物言の山得は花つ葉はしき妻相はひ方は
神をりし長崎所法年を更直に作すし一因縁
押あらしむ所方まのをゆく世をすむ者な指
垂りり方好むをた右にりしは以て
沙流の口新道へ何れも世に新くし
るも一依またあすくならぬまを
しん収受事一も亦も道も満るく
我のれし一も亦も道も満るく

我しとらふ世れはゆかや
何しん傍みりし
を月は何もも
道へかきりし
寺をりし
陰をりし
何しん傍みりし
新しん傍みりし

けられのけれ年とてや或信七感塚後とて
思ひしか事とて早建形と通中付れと上
妻より曾礼の交交の角残をなく給り礼
若白地撰目お交婚目礼お想借口元の整り後か
あ子先多しく指望昌よ業かゝる致る松田助八も
忍甲斐と有眼が女官をさすゝ免くゝを助八も
か増らうゝそを美入後を帯付る所と子息
なけも依をあが子とあやしたるゝゝゝ

子孫今よ業くけゝ想昌に依を業のそ以判好女
しゝゝのこ回丁のやゝ松尾より町屋御代業の
夫婦徳光一生樂ゝ業ゝ松尾松尾松尾
のた多より二家業ゝ想昌ゝは松尾より上の徳
主人の歌へお納ゝお出すお出の小紙よりお手存
り我自をお出ゝて末業業つそ花も実も
自女の後輝ゝ思ひ代の家とて実業
目出交業くけぢ

六

女塾付松田系番大尾

安政

三月ノ上旬迄